

令和 5年12月14日

鹿追町議会議長 上 嶋 和 志 様

総務文教常任委員会

委員長 山 口 優 子

所管事務調査報告書

本委員会は、下記のとおり所管事務調査を実施したので報告いたします。

記

1. 調査期間 令和5年10月30日（月）～11月2日（木）

2. 調査地・調査項目

(1) 岡山県 奈義町現代美術館

- ① 奈義町現代美術館の取組について
- ② 美術館の運営、課題について

(2) 岡山県 奈義町（なぎちょう）

- ① 人口減少問題について
- ② 子育て支援について

(3) 岡山県 西粟倉村（にしあわくらそん）

- ① ゼロカーボンの取組について

(4) 朝日塾中等教育学校

- ① 国際バカロレア教育について

3. 参加者

委員長	山 口 優 子
副委員長	佐々木 康 人
委 員	清 水 浩 徳
委 員	安 藤 幹 夫
委 員	金 子 孝 伸
議 長	上 嶋 和 志
企 画 課 課長	草 野 礼 行
議会事務局 主事	川 瀬 直 美

4. 調査の目的及び調査結果

(1) 岡山県 奈義町現代美術館

【概要】

平成6年（1994年）開館。建築家磯崎新氏による設計のもと、国際的に活躍している3人の作家に、これまでの美術館では収容不能な空間を含めた作品を依頼し、月・大地・太陽をテーマに半永久的に一体化した作品を展示した世界初の常設型美術館である。同一敷地内には同建築家がプロデュースした図書館が併設され、レストランも設置されている。

【調査目的】

奈義町現代美術館の取組について
美術館の運営、課題について

【調査結果】

開館は神田日勝記念美術館の開館の翌年、設立時には現代美術を常設展示することに対して住民からの反対も多かったが、展示を公共の施設として行うことが重要な意義があるとして現在に至っている。ギャラリーも併設されている。

町立美術館として、管理運営は奈義町が行う。財政的には厳しい状況であるが、ギャラリーでの企画等の支出を抑えて運営を行っている。

「空間の体感」、「子どもに還る」といったテーマが、徐々に評価を受け、コロナ禍でありながら、昨年は32,000人の来館者があり、これは通常年の1.5倍の集客で、今年度は昨年度を上回るペースで来館者が増加している。

課題は、施設の防犯問題と美術館での子どもたちへのワークショップなど教育活動への展開である。

【考察】

この美術館のコンセプトである空間の体感や写真撮影が可能であるなど、インスタ映えする等の評価を受け、若い世代を中心に受け入れられ、来館者の増加につながっている。開館から30年の時を経て、この現代美術館が町内外の多くの人に受け入れられてきた。時代がこの現代美術館の存在に追いついてきたような印象を受けた。また、美術館敷地内のスロープで保育園の子どもたちが遊んでいる姿もあり、お金をかけずとも子ども達が楽しめる空間をも建築家が見越してデザインしたようにも思えた。

併設の図書館も、同時期に建設されたものだが採光に工夫を凝らし、30

年の時を経ても最新のデザインのような印象を与える。有名な漫画家の出身地でもあり、この図書館の片隅で漫画を描いていたというストーリー性もあり、興味深い空間になっている。この施設を一体的にデザインした建築家の思いが伝わる唯一無二な公共施設であり、公共施設のデザインは町のイメージも含め総合的にされるべきとの思いを深くした。

奈義町長の挨拶の中で「町づくりは、マラソンではなく駅伝のようなもの、次代に引き継いでいくもの」との言葉をこの現代美術館を通して実践している。

(2) 岡山県 奈義町 (なぎちょう) (人口5, 725人)

【概要】

岡山県北東部、中国山地の秀峰「那岐山」の南麓に位置し四季折々の自然に恵まれた町で、主な産業は、農業、畜産、林業である。

昭和30年(1955年)2月に3村合併により「奈義町」が誕生し、平成14年(2002年)12月、合併の意思を問う住民投票において「単独町政」を決定した。

面積は、69.52km²(東西約9km/南北10km)で、人口は令和5年(2023年)4月1日現在で5,725人、世帯数は2,533世帯であり、町中心部から半径2kmに人口の8割が定住するコンパクトシティである。

特色として、自衛隊日本原駐屯地及び日本原演習場14.66km²(奈義町分は11.94km²)が行政区の約2割を占めている。

【調査目的】

町の子育て支援により合計特殊出生率が全国平均を上回る要因について

【調査結果】

(1) 奈義町の課題と目標

課題は、人口減少及び少子高齢化であり、その対策とし「生み育てる環境」、「住む環境」、「魅力ある教育」、「働く環境」を設定し「現在の人口を維持すること」を目標とした。令和3年(2021年)度に転入者は転出者数を上回る「転入超過」となったが、高齢者の死亡等、自然減は続き、人口減少は止まってはいない。

(2) 子育て応援宣言

平成24年(2012年)4月、子どもたちは次代を担うかけがえのない存在で、奈義町を守り支えてこられたお年寄りと共に、奈義町の大切な宝物である。

奈義町に住めば子育てが安心、奈義町は子育てがしやすい町との声が全国

に広まることを期待し「家庭・地域・学校・行政みんなが手を揃え地域全体で子育てを支えるまち」を目指し、「奈義町子育て応援宣言」を行った結果、令和元年（2019年）に合計特殊出生率「2.95」を記録し、「奇跡のまち」と称された。

(3) 子育て支援策

ア 子育て関連施設

保育園1園・幼稚園2園（令和6年こども園開園予定）、小学校1校、中学校1校（令和6年建替え完了予定）、子育て支援施設チャイルドホーム（令和2年度全面リノベーション）があり、奈義ファミリークリニックでは、乳幼児健診、学校医、予防接種、キッズ医療体験、病児保育が充実している。

イ 産前産後のアプローチ

産前には、悩み相談や各種子育て支援サービスの紹介を行う保健師による母子手帳交付時の面談及び育児に必要な情報等をプッシュ型で配信する「きずなメール」による情報発信を行っている。

産後のアプローチとして

①保健師による新生児全戸訪問

②母乳相談では産後1年未満の産婦で母乳育児等について相談支援が必要な方に助産師が無料で訪問（回数制限なし）する母乳相談

③就園前までの子供がいる方で簡単な家事などの支援を希望される方に生活支援サポーターが訪問（30分250円）する産後ヘルパーを行っており、今後の更なる推進策として

- ・心理士による産前産後のカウンセラーの導入
- ・父親の子育て力アップ事業
- ・子育て適応包括支援尺度（CARA）を活用した個別支援（大阪大学との連携事業で、町が保有する母子保健情報を基に「生誕1000日見守り研究」を実施し、産後うつの予防への効果を期待）の事業を予定している。

ウ なぎチャイルドホーム

子育て世代が気軽に通える施設として開放し、常駐する「子育てアドバイザー」に育児に関する相談に乗ってもらったり、子どもの社会的経験の場となるような活動、地域住民による子どもの一時的な預かりや、親子向けのイベント等も行っている。

また、病院に行く間や買い物に行く間だけなど、一時的に子どもを預かってほしい時に子育て援助会員（町内の高齢者）に依頼できる「一時保育すまいる制度」があり、なぎチャイルドホーム以外に、援助会員の自宅で預かる（1時間300円）こともできる。

エ しごとコンビニ事業

地方創生交付金を活用し、住民の子育てしながら空いた「ちょっとだけ」

の時間を活用して働きたい、みんなと一緒に仕事をしたいというニーズと繁忙期に「ちょっとだけ」手伝って欲しいという企業等のニーズに応えるため、一般社団法人「奈義しごとえん」（町民主体で法人化）が主体となりコーディネートしている。

仕事の例として、封かん・発送、PC入力、軽作業、整理・片付け、清掃、電話対応、梱包、農作業、案内、学習指導等がある。

【考察】

奈義町は子育て支援を重要視し、令和5年（2023年）9月から保育園でおむつのサブスクを導入することにより、保護者の負担軽減と保育現場の業務効率化につなげており、おむつサブスクの導入に合わせて「災害時における救援物資の提供に関する協定」をサービス提供会社と締結している。サブスクを通じて保育園の在庫おむつを災害時に奈義町内で無償配布するとともに、災害時においても保育施設に製品の補充等が行える体制を整えるもので、おむつの救援物資に関わる協定は全国初の取り組みである。

また、幼児期の子どもたちに「家庭的な雰囲気の中で育てほしい」との願いから始まった自主的な保育活動で、保護者と保育士が毎週火曜日から金曜日に当番制で子供たちの面倒を見ながら遊びや活動を行い、子どもだけでなく、親同士の交流も図っている。

経済的支援としては、生後7か月から4歳まで在宅育児をする保護者に毎月15,000円の支援金や、高校生に対する就学支援として年額240,000円の支援金等を支給するとともに、ICチップ入り電子カード多世代共生型「ナギフトカード」を全町民に交付している。

ナギフトポイント、ナギフト支援券、ナギフトマネー、給付金等の機能を有し、スマホ等で利用できる奈義町公式アプリの機能でナギフトカードと連携することにより、ポイントや電子マネーの残額・利用や付与歴が確認できるほかQR決済も可能となっている。

利用方法の一つとして、孫にポイントをプレゼントすることもできるため、高齢者の利用状況も高く、町民の気持ちに寄り添った経済支援を行っている。

人口減少問題としては、奈義町の特色である自衛隊日本原駐屯地が存在しているが、奈義町住民基本台帳の記載者は約400人であり、その6割が駐屯地内の居住者であることから合計特殊出生率には寄与していない。

奈義町を存続させるために、若者が定住し、多くの子どもが生まれ、高齢者がいつまでも元気に活躍する町民参加の町づくりを行っている。

高い合計特殊出生率を誇る「奇跡のまち」と呼ばれるには、金銭面的支援だけではなく、住むところがあって、働くことができ、子育ての負担が軽く、子育ての悩みや喜びが共有でき、町民皆さんが子育てを応援してくれる「安心感」なのかもしれない。

(3) 岡山県 西粟倉村（にしあわくらそん）（人口1, 323人）

【調査目的】

ゼロカーボンの取り組みについて

【調査結果】

西粟倉村は、岡山県の北東端に位置し鳥取県、兵庫県の県境に接する人口約1, 323人、面積57. 97㎢で、中国山脈の南斜面に開かれた谷あいの山里で、面積の約93%が森林、そのうち84%が杉や檜などの1950年代の植林による人工林で、そのほとんどが民有林である。

平成16年（2004年）、平成の大合併が進む中で村は住民アンケートで自立の道を歩む事を決め、村の資源である森林を切り口に村づくりを行うことを決定した。平成20年（2008年）、「百年の森林（もり）構想」が策定され翌年から森林の保全管理から、集約的に森林整備を進めるため間伐材の商品化や、活用できない残材のバイオマスエネルギーの活用により持続可能な森林経営を実施することをまちづくりの中心とし、村内外に情報を発信している。

また、事業開始から15年が経過し再生可能エネルギー事業を始めて、小水力発電、太陽光発電、家庭向け再生可能エネルギー・省エネルギー導入支援事業を推進する中、令和2年（2020年）4月には庁舎を含む複合施設全てを地元の木材を活用して建設した。

村民が「あつまる・つながる・やってみる」をビジョンとする生涯学習施設、図書館を併設することで村民一人一人が生きる楽しみや、地域を育むための拠点としている。また、「百年の森林（もり）事業」の理念に共感し移住・起業を行う若者が、ローカルベンチャー事業を取り入れた地域人材の流入、産業の多様化により関係人口の増加により人口減少を食い止める。さらにふるさと納税を活用しカーボンニュートラルに向けて地域の特性を生かし、まちづくりを進めている村である。

【考察】

小さな自治体が町村合併をせず自立を選択し、まちづくりを推進することは容易なことではない。地域の特性を熟知して把握し、その特性をどう活用して行政執行を実施し、若い世代から高齢者まで満足いくまちづくりができるかが重要であると推察する。

西粟倉村は森林面積が全体の9割を超え林業の村としての特性を生かし、15年前に上質な田舎づくりを実現していくため「百年の森林（もり）構想」を目指して地域資源を無駄なく活用し付加価値をつけることで経済の循環により村の活性化を図ってきた。平成26年（2019年）には「SDGs 未

来都市（自治体SDGsモデル事業）」に選定され、本町と同じく令和4年度（2022年度）には脱炭素先行地域に選定され、持続可能な地域社会の実現に向けて、資源となるものは全く異なるが非常に類似している。先行地域として未来に向かっての取り組み状況は、本町は規模的や進捗状況においても一歩進んでいると感じ取れた。

それぞれのまちの特性を生かしまちづくりの核となるものは何かを知り、住民が満足いく事業を執行することは行政の責務であり同時に内外に向けて常に発信していくことが重要であると感じた。

カーボンニュートラルに向けて国の目標と整合する取り組みは地域の特性に応じて実現する必要がある、脱炭素地域社会の早期実現に期待するものと思考する。

（４）学校法人みつ朝日学園 朝日塾中等教育学校

【学校の概要】

朝日塾中等教育学校は、岡山県岡山市にある私立中等教育学校である。前身校である朝日塾中学校・高等学校は、構造改革特別区域法（構造改革特区）により御津町教育特区の「研究開発推進学校」として認められ、日本で初めて株式会社が設置した中学校・高等学校でもある。中学校開校から7年後に学校法人の中等教育学校に移行し、その後数年で国際バカロレアMYP・DIPの両方を受け入れる学校となり、中国地方初の国際バカロレア両方の受け入れ学校である。

【調査目的】

国際バカロレア教育に関する調査

【調査結果】

IB（国際バカロレア教育）のMYP（Middle-Year-Program）を導入済みの岡山県岡山市の朝日塾中等教育学校を訪問調査した。この学校には中学1年生から高校3年生まで、全校生徒約200名が在籍している。

MYP教育プログラムは11歳から16歳までの生徒を対象にし、学習と社会のつながりを重視したプログラムである。MYPの導入は平成29年（2017年）8月に始まり、令和3年（2021年）1月にMYPに認定された。

朝日塾中等教育学校は、鹿追町と同様に地理的な条件が厳しく、募集定員を割っている学校でもあり、鹿追町と同様の状況に直面している。

教育面では英語と数学で、中1生から高1生まで学年ではなく、習熟度別に学習が進められている。学習評価もテスト結果に依存せず、テスト、授業ディスカッション、プレゼンテーション、成果物の4つの評価基準を使用し、このアプローチにより、単なる暗記型教育のテスト評価ではなく、生徒の日常の学習成果を含んだ統合的な評価が可能になり、自己解決能力の向上に寄与している。

地方の学校がIB教育に取り組む意義として、地域とのコミュニティの強化が挙げられる。国際的な視野を持ちながらも、地域とのつながりを重視することで、生徒の意識の変化が見られており、具体的な例として、地域の七夕まつりを450年ぶりに復活させ、地域住民や行政と協力してアイデアを提供し、地域活性化を促進した経緯がある。これは地域コミュニティの維持において、世代間の壁をなくす効果的な手段となっており、IBの全世界共通使命である積極的で共感的な学びを生涯にわたって推進することが、現代の生涯教育においても重要視されている。

加えて国が掲げている生きていく上で必要なリスキリング（学び直し）においてもIBが果たす役割は大きい。

【考察】

IB教育に関しては、メリットは計り知れない教育プログラムであることが明らかであった。しかし、そこにたどり着くまでの課題も多々あることも理解できた。

1点目は、学校の組織体系を作り維持する難しさである。公立校では、教員の異動は必須であるため、このプログラムを教師に教育を進めても異動により、整えられた組織形態がリセットされてしまう課題は存在する。

この点について、組織全体のIBプログラムに対する考え方の一致をどう現実化するかの検討は必要である。

2点目は、生徒や保護者の理解をどう得るかである。これまで経験したことのない教育プログラムであるため、私たちも実際に導入校を訪問し、話を伺い、一定程度理解できたと思うが、何もないところからは、このプログラムの良さを知ることは難しいと考える。生徒や保護者への親切な説明が要すると改めて思うところである。

私たち世代が経験してきた知識詰め込み型教育は、AIの発達で今までの暗記知識が容易に入手できる現代において意味が薄れつつある。そのAIを駆使し、間違いのない、使い方や考え方をどう教育の中で得ていくのかを考える上で、IBは必要不可欠なプログラムとも言えるのではないだろうか。

また、これに取り組むことで当町の教育が再評価され、人口流入にもつな

がる可能性も考えたい。その意味でも、短絡的に「良い」「悪い」「合う」「合わない」でなく、上げられた課題をどう解決できるのかを考えて行くことが重要である。

【総合考察】

岡山県奈義町、西粟倉村ともに、小規模自治体で、鹿追町との類似点が多く、参考になる点が多かった。両町とも先進地として、多くの視察を受け入れており、視察料金も1団体1万円+1人1000円に設定されている。

奈義町現代美術館と図書館は30年前に造られた建物だが、古さを感じるどころか、斬新さが目を引く建物で、徐々に高い評価を受けるようになり、年々人気が高まっている。この施設を一体的にデザインした建築家の思いの詰まった公共施設は、間違いなく奈義町のイメージを向上させている。

子育て支援施策においては、制度や施設が充実しており、金銭面の支援だけでなく、住居や仕事の斡旋などにも力をいれている。登録制の「奈義しごとえん」では、子育て中の若い母親が高齢者にスマホの使い方やパソコンを教える仕事、役場の書類の封入作業などのマッチングが出来ており、地域のコミュニティづくりにも貢献している。鹿追町の子育て支援施策に取り入れられそうなことは、おむつのサブスクサービスや、在宅育児を行う保護者に対し、月額15,000円を支払う在宅育児支援手当などがある。在宅育児支援手当は、保育士不足の課題解決の一助にもなっていると感じた。

西粟倉村では、林業の村としての地域の特性を熟知して、その特性を活用する「100年の森林（もり）構想」が国の脱炭素の取り組みとも合致し、脱炭素先行地域に認定された。若者がローカルベンチャーを起業する取り組みは見習いたい。

朝日塾中等教育学校では国際バカロレアの授業を実際に見学し、教育プログラムとしてのメリットと、導入に至るまでの課題の一部を理解できた。

鹿追町においては、町立小中学校、道立高校であり、バカロレアプログラムを教える教師の転勤の課題がある。また、生徒、保護者共に町民の理解においても、机上の説明で理解が得られるかどうか、また、認定校になったとしても、バカロレアの世界共通の試験に合格者を出さないことには、バカロレア導入校としての生徒募集には課題が残る。しかし、短絡的に「良い」「悪

い」を判断するのではなく、課題をどう解決できるのかを考えて行くことが必要である。

今回の研修では岡山県内で効率的に視察でき、有意義な研修であったし、現地に赴くことで理解が深まることを再確認した。いずれの取り組みにおいても、本町に取り入れられることは検討していきたいが、その際、町民との対話と理解が重要である。